

富嶽「村山古道」縁起を^{ほろく}穿ってみた（「富士山参詣曼陀羅」紀行）

大棟梁権現 法印法眼 大法螺阿闍梨（述）



〔狩野元信筆「富士参詣曼陀羅図」（部分） 室町時代 重要文化財 富士山本宮浅間大社蔵〕

（山巔には如来三尊が描かれ、画面右半分には白装束の登拝者の行列が見える。下部両端に日輪と月輪）

富士山には何回も登ったが、何れも海外登山準備のための高度馴化や氷河歩行技術訓練が目的の単なる訓練登山に過ぎず、およそ富士山登山などという趣向は全く無かった。

開山前の残雪期の登山ならまだしも、真夏の登山道の蟻の行列、立錐の余地も無い大混雑の山小屋、登山道に流れるトイレの臭い、などなど、どれをとっても登山として登りたいと思っことは無かった。

しかし、老化して高度馴化が必要な高峰に出掛けることなど望むべくもなくなった現在、自宅から毎日見るともなく富士山を眺めていると、やはり富士山という山は他の山々とは異なった次元の存在であるという気がして来だした。西方浄土（私の場合は西方穢土）からのご来迎が近くなった所為もあろう。

左様な次第で、前世の悪因浅からず加えて今生でも悪行の限りを尽くしてきた小生には、「二河白道」（三途ノ河）を渡る前に一度はちゃんと“供養”登拝しておかないとあの世で六道の闇夜に墜とされるのではないかと気が気ではなくなってきた。コロナ大魔王にも狙われていることでもあるし・・・。

しかしながら、養老院の宣伝ビラに眼が行き出した現在、山小屋クローズ中の積雪期・残雪期の登山は遭難事故を引き起こすだけだし、蟻の行列の夏場には後ろから来た若者の群れに尻を蹴り上げられるのがオチだから他に何か良い方法はないかと思案していたところ、何年か前から「村山古道」という昔の修験道が隠れたルートとしてその道の通に人気が出ていることを知った。

村山古道というのは富士山の最も古い修験道で、一千年近くも富士山登拝のメインルートであったが、明治維新の廃仏毀釈令による修験信仰の衰退と登拝路の変化などにより廃道となった。一世紀半の後、富士山復興の為の地元有志の調査でこの古道跡が同定され、再び陽の目を見ることになったのである。

マ、そのようなことから、山行記録などに当たってみると、3泊4日の行程で歩けば何とか往時の山伏と同じ経路・行程で村山修験道始点の駿河湾・田子ノ浦から終点の富士山頂・浅間神社奥宮まで辿れる見込みがいたのであるが、残念ながらコロナ戒厳令で実施の目途が立たなくなった。

どうせ歩くなら古道の縁起や歴史も知っておいた方が興味が深いだろうと、種々の資料にも当たって村山古道や富士山浅間信仰の歴史も繙いてみた。この駄文は、その辺に転がっていた本の受け売りであるから真偽のほどは保障の限りではないが、ご興味のある方は適当に斜め読みして下さいれば、また、ご興味の無い方は読み飛ばして後半の参詣曼陀羅図で往時の登拝者の様子でも眺めて頂ければ幸甚である。

さて、村山修験道は上で述べたように、駿河湾の田子ノ浦からスタートして、途中の村山浅間神社（神仏混交の往時は富士山興法寺でもあった）で水垢離をとって護摩を焚き、そこから山麓の深い森の中を歩いて現在の富士宮口新六合目に至り、新六合目からは現在と同じ富士宮ルートを進んで富士山頂・浅間神社奥宮に登拝するというルートであった。

田子ノ浦から村山浅間神社までの裾野の平地及び里山の区間を「村山道」と呼び、村山浅間神社から富士宮口新六合目までの山麓樹林帯の区間を「村山古道」と呼ぶ。

村山修験道の位置を右図に示した。

「××口」は江戸時代の登拝ルートである。この内、現在の富士山のメイン登山ルートは、静岡県側の富士宮口、須走口、山梨県側では吉田口が残っているだけであり、新たに静岡県側の御殿場口が加わっている。村山古道は「大宮・村山口」と書かれている部分である。

さて、村山古道に進む前に、富士山信仰の歴史を振り返ってみよう。静岡県富士宮市や山梨県都留市での考古学発掘調査結果によれば、縄文時代の遺跡の配石遺構には既に富士山を霊山として拝むための拝み所としての配石構造が認められたそうだ。雪が降り積もり噴煙がたなびく富士山は人間が生活して行くために不可欠な豊かな水や食べ物となる動植物を恵んでくれる女神であると同時に荒ぶる神でもあったから、狩猟採集民であった縄文人は事ある毎に富嶽を霊山として畏まって拝んだのであろう。従って、この頃の富士山は足を踏み入れてはならない聖域で、登拝するなどという対象ではなかった。

時代は移ってやがて奈良時代になると、山部赤人の「田子の浦ゆ うち出れば 真白にぞ 不尽の高嶺に 雪はふりける」に代表されるように、富士山はその神秘的な崇高さのゆえに神々の住む霊山として、また空・太陽・雲・雷などの天体現象にも結び付けられて崇められた。その一方で、悪魔、魑魅魍魎、異人や死者の住む場所として畏れられもした。

また、関東平野に住んでいた往時の人々の目には、天を衝く高い山は西の富士山と東の筑波山であり、筑波山が樹木に覆われた親しみ易い山であり多くの男女が集う歌垣の山として登られ賑わったのに対し、富士山は噴煙を上げる神秘的な荒ぶる山として遥か下界から畏敬するだけの山だったらしい。

このことは、奈良時代に編纂された『常陸国風土記』の中に「^{ふじ}福慈ノ神」の伝承として記録されている。

さて、更に時代が進んで平安時代になると、この富士の霊山に登って修行をする山岳修験者が現れた。^{まつだい}末代上人と呼ばれた山伏で、富士山に登ること数百回、山頂に大日寺を建立、また山麓の村山口に上述



の興法寺を建てて富士山修験の根拠地とした。後に富士修験の根元ノ地となった村山浅間神社である。

余談であるが、この頃から富士山のみならず、奈良吉野の大峯山を開祖とする山岳信仰（修験道）は、出羽三山、日光、箱根・丹沢、越後八海山、立山、白山、熊野、伯耆大山、石鎚山、英彦山などに広がって行った。この修験道は著名な高峰だけでなく全国津々浦々に広がり、名がある霊山だけでも青森県から沖縄県まで合計 108 ケ所を数えるという。

この山岳信仰を隆盛させた伝承として「黒駒太子」伝説がある。伝説によれば、或る時聖徳太子は三日間ほど行方不明になったことがあった。帰ってきてから言うには、自分は馬丁を連れて甲斐の国から献上された黒駒に跨り富士山を飛び越して越ノ國を廻って来たと話した。この話に尾緒が付いて、聖徳太子が富士山に飛んで登ったという話になり、富士山を越える聖徳太子の仏画が製作され、この仏画を死んだ人の上にかざせば極楽に行けるという信仰が生まれた。この霊験はあらたかで、特に東北地方や信越地方で大流行したそう。その結果、富士山での山岳修験が有名となった。今流に言えば、越中富山の薬売りが販促品として持ち歩いた立山曼陀羅図と同様、山伏観光ツアーリスト会社の添乗員である当時の“御師”の客集めの道具（絵解き曼陀羅）だったのであろう。

これらの仏画の原典は、黒駒太子像として平安時代に作成された「聖徳太子絵伝」の中に既に描かれているので、満更出鱈目でもあるまい（下図、右上が黒駒で富士山を翔け越える聖徳太子）。



ところで、未だ火を噴いていた頃の富士山は神仏が宿る霊山であって人が登る山ではなく、その暴れる神仏を鎮めるために浅間大神あさまのおおかみを祀った。これが富士浅間神社の起源である。この浅間神社せんげんは前ページの地図に記載されているように、富士山麓の拝み口にそれぞれ〇〇浅間神社として合計 9 ケ所の浅間神社が勧請された。余談であるが、「浅間」というのはアイヌ語で火を意味する「アサマ」で、同じく火を噴いていた浅間山も阿蘇山も「アサマ」からの由来であり、漢字の浅間あさまを充てたためにいつの間にか浅間せんげんと読まれるようになったらしい。

これが浅間信仰の始まりで、やがて噴火活動が鎮静化した平安時代の終わり頃からは仏教の影響で修験道の山伏が修行の為に登るようになってきた。山伏の修験道は上記地図の「××口」に沿った 7 本のルートがあったが、これらは修験道のそれぞれの宗派によって登るルートが決まっていたのであろう。

さて、この頃の富嶽信仰登山は広く一般庶民が登拝するまでには至っておらず、修験道の修行者が僅かに登っているだけであったが、「村山道」と「村山古道」はそれらの登拝ルートの最古のものであり、それ故に一番メインの登拝修験道でもあった。次の曼陀羅図は冒頭に掲げた富士参詣曼陀羅図の全体像

であり、描かれている道筋は「村山修験道」である。小さいので見づらいが、修験者、僧侶、登拝者、参詣者、武士、庶民などの人物が丁寧な筆で 250 人も描かれており、夫々が躍動感に溢れている。



山頂三尊

登拝者行列

日輪・月輪

御室大日堂

女人堂

中宮八幡宮

村山浅間神社
興法寺

富士山本宮
浅間大社

駿河湾 田子浦

三保松原

さて、それでは、行者になってこの富士山参詣曼陀羅図の村山修験道を辿ってみよう。
富士山修験の行者は行脚を始めるに当って、まずは田子浦で海に入って齋戒沐浴し遠く富嶽を見上げて遥拝した。この時、浜に打ち上げられていた丸石を拾って来て近くにあった富士塚に供えるという風習があった。吉原駅の近くにある現在の「鈴川の富士塚」(次頁の写真)である。

富士塚と称するモノは江戸時代になって江戸を中心に各地で繁盛した「富士講」が町中に造った標高1m程度のミニ富士山であり、湯屋の壁に描かれた富士のお山と同様な仕掛けで、これを拝めば本物に登拝したのと同じ功德と験を得られるという便利なシロモノであるが、同じ富士塚でもこの「鈴川の富士塚」はこれらの安直富士塚とは異なり、実際にこれから富士山修験に出掛ける行者が道中の安全を祈って拝んだものという。

塚の天辺には浅間神社の祠も祀られていて、祠越しに霊峰富嶽を遥拝すれば、ナルホド気が引き締まったのではなかろうか。曼陀羅図で、田子浦の直ぐ先（上側）に大きく描かれている社殿は全国浅間神社の元締めである富士山本宮浅間大社（富士宮市）である。境内の中央に禪姿で池に入っている男衆が描かれているが、富士山に登拝する行者は境内の富士山からの伏流水が湧出している湧玉池の霊水で禊をしてから富嶽修験登拝に向かうという仕来りがあったのである（右に拡大図）。

この本宮浅間大社を通る修験道は、本来の村山道ではなく、大宮（本宮浅間大社がある富士宮市大宮）から村山浅間神社に至る間道「大宮口」であり、後には「大宮・村山口」として賑わった。

次に、本宮浅間大社の上側に描かれているのが、村山古道の始点である「村山浅間神社」である。前に触れた富士山修験道の元祖・末代上人が富士山興法寺を建立して村山古道の根源の地とした場所である。末代上人はこの寺で即身成仏して入定したと伝えられている。浅間信仰が広まった時に、同じ境内に神仏混交の村山浅間神社も勧請された。では、興法寺（村山浅間神社）の境内に入ろう（下図）。



画面右端の拝殿では巫女が舞っており、それを白装束の女が見ている（拡大図：下左）。女は市女笠に垂れ衣を被っているようだから高貴なお方であろう。子供を背負った女や童も描かれていて、浅間信仰は行者や山伏だけでなく庶民の女や子供にも人気があったのであろう。

本堂の周りには行者や武士、町人も見える。回廊に座って拝んでいるのは代官であろうか？ 回廊の周りには登拝者や山伏の姿も描かれているようだ。右下の竜頭ノ滝（垢離場）では行者が4人水垢離をとっている（拡大図：下右）。右端の人物は垂れ衣と思われる姿で描かれているので女性であろう。男性3人は裸の禪姿で滝に打たれているが、女性は垂れ衣の儘で禊を行なっているようだ。往時は女性でも滝行を行っていたのであろう。男女混垢離!?が微笑ましい。



（拡大図：拝殿で舞を舞う巫女と市女笠の女）



（拡大図：水垢離の男女）

ここには描かれていないが、村山浅間神社では護摩神事も盛んに行われたそう。右は現在の開山祭での山伏による護摩焚き神事の様子である。

富士山興法寺（村山浅間神社）は、14世紀頃には京都の門跡寺院聖護院を本拠とする天台系の修験集団「本山派修験道」に組み入れられた名刹であったから、毎年聖護院から大僧正が来駕して大護摩供養が行われた。この曼陀羅図で、巫女が舞う拝殿の上部の赤い小堂宇の前に3人の人物が描か



れているが、この内の僧形が聖護院の大僧正と考えられている。中央の人物は尻皮（山伏用語では引敷と呼ぶ）を着用しているのが、案内役の山伏であろう。右側の荷物を担いだ男は従者であろう。

画面の左上にも数人の僧形が描かれているが、僧衣の様子から聖護院から来た高僧と考えられている。

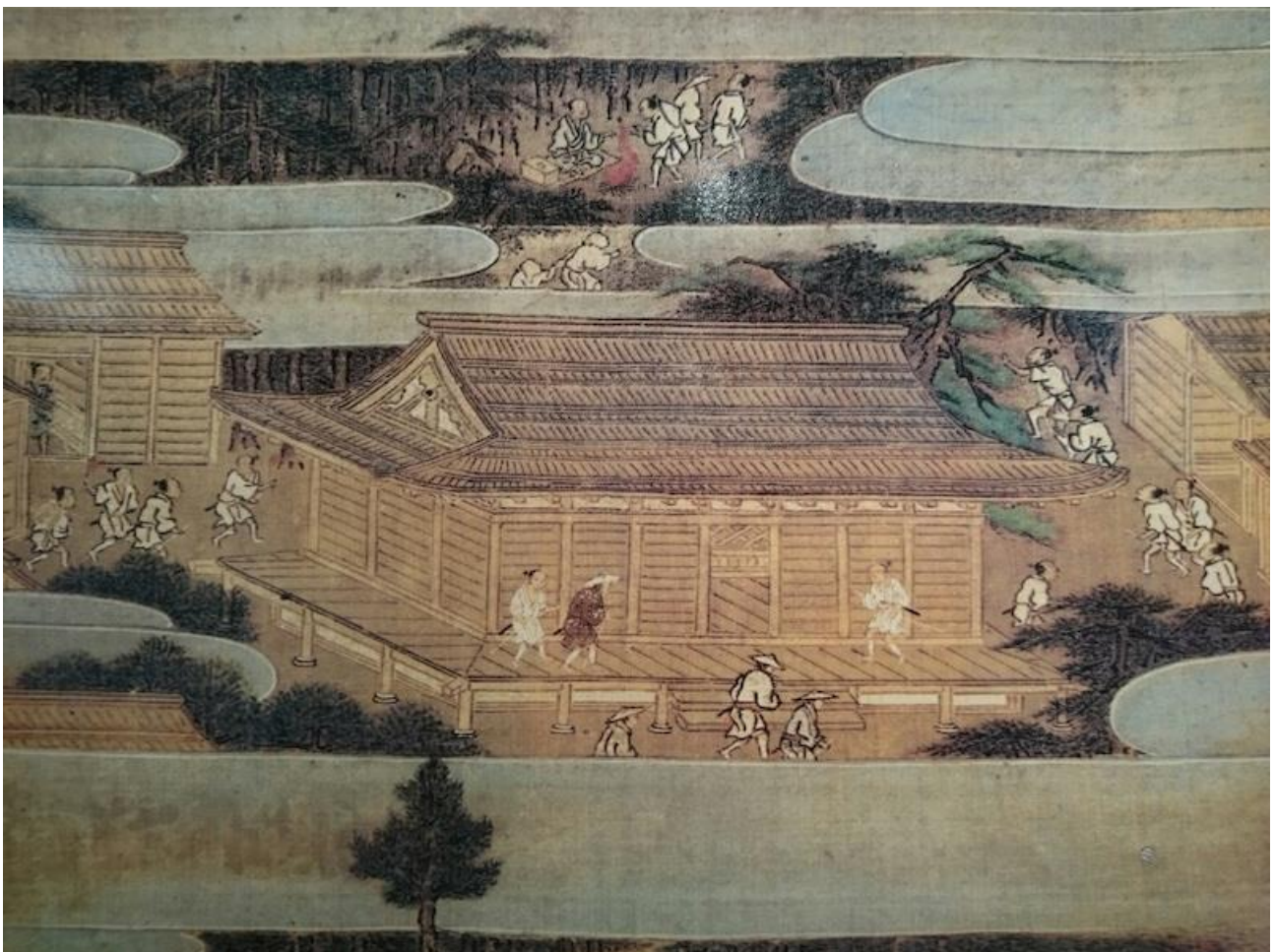
曼陀羅図で村山浅間神社の上に描かれている次の堂宇は中宮八幡宮と女人堂である。ここにも白装束の男女が描かれている。中宮というのは、登拝道の間道に設けられたお宮である。因みに、登拝道の始点にある神社が下宮で、大宮・村山古道で言えば村山浅間神社や本宮浅間大社が下宮にあたる。上宮は山頂に祀られた奥宮である。

女人堂というのは、ここから上は女人禁制という結界に設けられた堂宇で、女性の登拝者はここから上には登れず、この堂宇に一晩籠って遥拝した後に下山する。女人は御師や山伏に連れられて登拝する仕来りであったから旅の恥は掻き捨て、男女双方にとっても歌垣などのソノ方面の験と御利益もあったかも知れない（下世話の話でスママセン）。

中宮八幡宮は明治時代末頃までは社殿などが残っていたそうだが、現在は小さな石祠が祀られているだけであり、女人堂は跡形も無いそうだ。下は明治時代の頃の中宮八幡堂(左)と現在の様子(右)である。



女人堂の上に描かれている次の伽藍は御室大日堂である。この旧蹟は現在は何も残っていないので、どこにあったかも定かでないらしいが、今の富士宮口新五合目登山口付近か新六合目の宝永荘の辺りだったのかも知れない。下は御室大日堂の本堂付近の拡大図である。



ここは登拝道中最後の宿坊でもあったようで、本堂左横に描かれている堂宇にご注目頂きたい（拡大図：下図左側）。編み笠を被った町着の男が小屋に入って行き、逆に小屋から出てくる人物は皆白装束に着替えている。後ろ側の小屋の棚には白装束が積まれていて、それを貸し出しているらしい女性の姿も見える。即ち、ここから上は聖地に入るので、世俗の姿は全てここで脱ぎ捨てて白装束の浄衣に着替え、最後の修験道に踏み込んで行ったのであろう。本堂の回廊から右回りに沢山の白装束姿が登って行くのが見える。小さくて見にくいですが、その本堂のすぐ上に数人の白装束と赤い炎のようなものが見える（拡大図：下図右側）。よく見ると火を焚いている寺男が登拝者に松明を売っているところである。現在の富士山ツアー登山と同様に頂上でご来迎を迎えるために真夜中に出発して行ったのであろう。

御室大日堂から上には、現在の富士宮口登山道と同じ岩道を蟻の行列を成して登って行く行者の群れが描かれている。消え残っている雪渓や岩稜も描かれていて、六根清浄の掛け声が聞こえてくるようだ。



以上、大急ぎで富士山参詣曼陀羅図を走り抜けて来た。この曼陀羅図を原本にして、参詣図（山絵図）と言う案内絵図が作成され、富士修験の御師が地方へ持って廻り客集めの折の絵解き図として使った。現在のツアーサービス会社の旅行説明会でのスライドショーと思えばよい。また、立山曼陀羅や白山曼陀羅と同様に、一生に一度の念願の登拝を済ませた庶民が買って帰ったお土産品でもあった。

さて、このようにして村山古道は富士山登拝道として賑わったのであるが、江戸時代になって富士講が盛んになると、北口の吉田口などに富士講の客を奪われ、また、明治維新の神仏分離・廃仏毀釈令によって修験道が瀕死の迫害を受けたために村山修験道は衰退を余儀なくされた。加えて、本宮浅間大社から村山口を経由せずに直接富士宮口新五合目に至る登拝道（現在の富士宮口）の開通により村山古道は忘れ去られて地図からも消えた。それから約 100 年後、村山浅間神社の氏子や地元の篤志家などの御尽力で古道調査がなされ、かつての古道が再び陽の目を見ることになったのである。

コロナが収まったらこの古道の登拝に出たいものである。どうせやるなら修験道の山伏装束で登りたい。山伏の装束は、菅笠、「頭襟」(頭に着ける椀のような物)、法螺貝、鈴懸衣(白衣、上着)、結袈裟(略袈裟)、鈴懸袴(土方が履いているようなだぶだぶズボン)、引敷(尻皮)、脚絆、草鞋、錫杖などである。この内、菅笠、鈴懸衣、結袈裟、錫杖はかつて四国遍路行脚で使った物が流用できる。鈴懸袴は昔使った山用のニッカ・ボッカが使いそうだ。脚絆はスパッツ、草鞋は沢登りで使い残した草鞋が一足残っていた筈だ。引敷は半世紀前の雪山登山で愛用していた狸の尻皮がある。頭襟と法螺貝はどうにもならないが、どこかに山伏装束のレンタル屋があるそうだからそこで借りることにしよう。

これで姿、形は整った。さて、出発するとするか・・・。

(了)